

[島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 56 205～211 (2017)]

視覚障害を持つ学生による演習型授業の取組について

— 「読み聞かせの実践」を通して—

岡本 千佳子

(総合文化学科・保育学科非常勤講師)

Regarding Practical - Type Class Activities Conducted by Students with Visual Impairment
- As Examined Through "Storytelling Practice" -

Chikako OKAMOTO

キーワード：視覚障害 visual impairment
読み聞かせ storytelling
演習型授業 practical-type class

1. はじめに

島根県立大学短期大学部松江キャンパスでは、絵本の読み聞かせを取り入れた「読み聞かせの実践」という授業を行っている。

この授業は、学内にある児童図書専門図書館「おはなしレストランライブラリー」を拠点としたきわめて実践性の高い演習型の授業である。学生たちが絵本に親しみ味わうとともに、近隣の小学校・幼稚園へ出向き、子どもたちに自分の選んだ本を読み聞かせることにより、人間力の向上を目指すものである。小学校では単独で10分間の読み聞かせ、幼稚園ではペアで30分の枠で絵本の読み聞かせと、「つなぎ」とよばれる手遊び・クイズ等をする。

2013年度後期に保育学科の視覚障害のある学生から「読み聞かせの実践」の履修希望が出た。それでも発達障害等の障害を持った学生の履修はあったが、視覚に障害を持つ学生の履修は初めてのケース

である。言うまでもなく、「読み聞かせの実践」で用いる教材は絵本である。絵本は、一般に「絵」と「文字」の2種類の視覚情報によって成り立つ。視覚障害を持つ学生にとって、この授業で行う実践は相当の困難を伴うものであることが予想された。

本稿は、視覚障害を持つ学生による、より困難さの度合いが高いと思われる演習型授業の取組についての記録である。視覚の不自由な学生がいかに絵本の読み聞かせに取り組み、授業担当の教員スタッフがこの困難な課題にいかに取り組んだかを振り返ってみたい。本稿が、障害を持った学生の学びのあり方、学習支援のあり方について考える一助となれば幸いである。

なお、その学生は「Aさん」とし、この報告の公表については本人の承諾を得ている。

2. 授業まで

平成25年の後期開始直前、本学保育学科より、視覚障害を持つ学生Aさんの「読み聞かせの実践」の履修について相談があった。Aさんは、幼少期からの複数の眼科疾患により強度の弱視と視野狭窄を有し、盲学校からの本学進学であった。相談の内容は、Aさんは成績もよく保育士を目指しているが、低年齢児の対応に安全面で難しい点があるため、「他の教員免許や福祉職へ選択肢を広げ、進路の考え直しを進めている。この授業での単位取得は難しいかもしれないが、小学校での読み聞かせなどを経験して、保育士以外にも世界はあるということ、本人に考えてもらいたい」という旨であった。

これらを踏まえて、次の1)、2)のような配慮が必要だと考えた。

1) 座学時の配慮

配布物は、A4版の資料をA3版とし、文字の大きさが20ポイント以上になるよう調節する。スライドを用いる場合は、拡大したものをプリントアウトし、Aさん用に配布する。

2) 実践時の配慮

(1) 選書

この授業の大切な柱に、まず「本を選ぶこと」がある。おはなしレストランライブラリーには、約6,000冊の絵本、125冊の大型絵本、140タイトルの紙芝居がそろっているが、点字絵本はわずか2冊しかない。学生たちは、実践のスケジュールが決まった時点で選書に入る。絵本の「絵」を見る、題名を読む、読んでみたいと感じる、実際に読んでみる、実践の本として選ぶ、という一連の選書の際の流れが、Aさんにとってはどれほどの負担がかかることなのか、スタッフには想像もつかなかった。そこで、視覚障害を持つ人にどのような読書支援の方法があるのか、情報を求めた。

情報収集のため訪問した先は以下の通りである。

- ・松江市立図書館
点字絵本数点所蔵、拡大読書機(印刷された文字

等を拡大し画面に映し出す機械)所有

- ・島根県立図書館
点字絵本数点所蔵、拡大読書機、「よむべえ」(活字文章を認識し音声に変換する機械)、「デージー図書」(DAISYという規格を用いたデジタル録音図書)所有
- ・社会福祉法人 島根ライトハウスイブライリー
点訳・音訳図書の提供(一般図書のみ)

いずれも視覚障害者が本を読む手段としては有効だが、残念ながら「どうしたら視覚障害のある人に読みたいと思う絵本に出合ってもらえるか」という要件を満たすものはなかった。

- ・島根県立盲学校
点字絵本、「デージー図書」、「よむべえ」、拡大読書機所有。「サビエ」(点字・音声で書籍等のデータサービスを提供するネットワーク)利用。

盲学校の司書より、上記のほかに、大阪にある「てんやく絵本 ふれあい文庫」(以下「ふれあい文庫」とする)について情報を得た。

この「ふれあい文庫」は、視覚障害のある岩田美津子氏が、我が子に読み聞かせをするため、既存の絵本に自作の透明な点字シートを貼って「てんやく絵本」を作り、それらを文庫として貸し出しをはじめ、さらにたくさんの人に利用してもらうため、全国にその点訳絵本の貸し出しをしているという貴重な情報を得た。

また、ここではたくさんの読書支援法を知り、本と出合うときに、Aさんにとって 耳(音声)、目(墨字)、点字のうちどういう形で情報が入ってくるのが楽なのか、それによって選択肢が違う、という重要な気づきをさせてもらった。

そこで、授業開始後Aさんと話し合いながら、よりやりやすい方法で選書へのサポートをしようと考えた。

(2) 実践方法

読み聞かせは、読み手が絵本を子どもたちに対面させた形で持ち、絵を見せながら本と平行な位置か

ら文章を読むのが一般的である。Aさんは弱視・視野狭窄の両面からこの方法は困難であると考えられた。そのため、可能な読み聞かせ方法を以下の通りに考えた。

- ・絵本を丸暗記して、通常の読み聞かせと同じ形態で読む
- ・片手で絵本を見せながら、点訳した文章をもう一方の手指で読む
- ・ストーリーテリング
- ・紙芝居（紙芝居裏面の文章の文字を拡大）
- ・大型絵本の読み担当（ペアで実践の幼保園のみ可能）

対象や、ケース、読みたいもの、本人の要望・必要に合わせて選択していこうと考えた。「読むこと」事体の実践の問題点は少ないと考えられた。

（3）その他

- ・ペア

幼保園の実践はペアでの活動となるため、通常、最初の授業でくじ引きによりペアを作る。Aさんのペアはサポートを望める学生の配置を検討したが、学科内の人間関係の円滑さやAさんのコミュニケーション能力の高さを考え、通常通りのペア選定方法をとることにした。

- ・移動方法

実践先の幼保園へは、大学から専用車で往復するが、小学校へは現地集合、現地解散である。市外から電車通学するAさんに、慣れない場所への実践の負担を考え、大学からの送迎を提案することとした。ただし、実践開始後、電車通学の学生から、一緒に実践に向かうので送迎は不要との提案を受け、現地集合・解散とした。

- ・実践先へのお願い

視覚障害のある学生が実践させてもらうことについて、特別な配慮は不要だが実践先の教職員の間で周知してもらうこと、特に小学校では通常とは異なった形での実践になる可能性があることなどを、担当の先生にお願いし、具体的な実践方法が決まったらそのつど知らせることとした。

3. 初めての授業

Aさんの受講動機は「いろいろな場所で読み聞かせの体験・実習をしたい」というもので、好きな絵本は『はらぺこあおむし』（エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社）をあげていた。高校生の時、この本の大型絵本とペープサート（人物の絵などを描いた紙に棒をつけたものを動かして演じる紙芝居のようなもの）を使って読み聞かせをしたことがあるとのことだった。

授業について、ひとつひとつスタッフが具体的に説明すると、「自分でできます」「大丈夫です」という答えが返ってきた。ガイダンス時、スタッフの一人にそばにいてもらい、サポートをしてもらったが、Aさんの反応は良好ではなく、自分のことは自分でしたいという思いが伝わってきた。そこで、Aさんをできるだけ特別扱いはせず、必要に応じてサポートすることとした。

4. 初めての選書

選書の時間には、配布した実践スケジュールに合わせ、実践対象を考慮しながら、自分の目で絵本を見、読んで、実践で読むべき本を決めていく。小学校の一回目の実践用の選書は、学生たちにとって悩みどころの、かつ楽しい時間だ。学生たちがライブラリーに散り、思い思いの本を手にとって読み、少しずつ候補を決めていく中、Aさんは本を手にとって、少し見ては戻すという繰り返しをしていた。

一般の学生ですらたくさんの数の本の中から、これと思う本を見つけるのは難しい。Aさんにとって目から入る情報が乏しい中で選ぶのは、予想通り困難であるようだった。そこで、声をかけ大型絵本コーナーに案内した。候補を絞るためと、絵をしっかり見てほしいと思ったからである。今回は「自分でできます」「大丈夫です」とは言わず、大型絵本を一冊一冊丁寧にみて「こういう絵が好き」とAさんが選んだのは、林明子、柿本幸三などのやわらかいタッチで描かれたやさしい絵本だった。

そこで、好みと思われる本を数冊見せながらあらすじを紹介し、「読んでみたい」と希望のあった本の普及版を貸し出し、家でじっくり読んでから決め

ることとした。同時に実践方法を相談し、初回の小学校の実践はその本の文章を自分で点訳し、点字を読む形にすることに決めた。

それとともに、今後の選書と実践方法について提案した。選書方法は「一番情報を入れやすい、点字が楽」とのことで、「ふれあい文庫」から本を借りることに決まった。さらに、今後の実践方法についても提示し、その都度一緒に考えていくこととした。

さっそく「ふれあい文庫」に連絡し、貸し出しの依頼をした。貸し出し冊数を問うと、「図書館、あるいは学校ならば、一人の子に対して30～50冊の本が必要だ。他の学生が何千冊もある中から1冊の本を選ぶのに、Aさんだけが選択肢が少ないのはよくない」という貴重な意見をいただき、早速次の実践に応じた4～6歳向けの絵本を50タイトルお願いした。「ふれあい文庫」には、この後も選書に間に合うよう対象年齢の違う絵本を50タイトルずつ貸し出していただいた。これによりAさんは受講中150冊もの絵本に触れることができた。

幼保園での1回目の実践は、Aさんの負担を考慮し、以前読み聞かせの経験があるという『はらぺこあおむし』に決めた。ちょうどその実践に向けて準備をしている最中に「ふれあい文庫」から絵本が届く。その中からAさんは『はらぺこあおむし』を見つけ「これ借りてもいいですか」と借り出した。「読み聞かせの実践」の授業開始後、受け身の姿勢でいたAさんが、点字の本と出会い自主的に読む、借りるという行動に移ることができた。

ただし、文庫の本は普通の絵本と同様に、絵とテキストが同じページに書かれているため、集団に向けての読み聞かせをする場合に、その点字を読もうとすると、手や体で絵が隠れてしまう。そのため、文庫の本を用いる場合も、あらためてテキストだけ点訳したものを別に用意することが必要だということが分かった。

5. 幼保園での実践

1) 11月11日 (4歳児クラス)

『はらぺこあおむし』大型絵本

点訳本使用。ペアのBさんが本をめくり、Aさん

は読み手。点字を読むので視線は子どもたちに集中できた。

実践記録に、子どもたちから反応が返ってくることの喜びを記している。

2) 12月2日 (5歳児クラス)

『おまんじゅうのすきなとのさま』(日下部由美子作、篠崎三郎絵、童心社)紙芝居

選書時、「紙芝居を読みたい」というAさんと、スタッフが選んでいると、ごく自然にBさんがAさんに紙芝居を読み聞かせ始め、二人で選んだ。「これ面白いね」「こっちはどう?」と話し合いながら二人で一つの実践を作り上げることができた。実践では子どもたちは大笑いしながら聞いていたが、Aさんは紙芝居裏面の墨字を読むことで子どもたちの様子が見づらかったことをあげている。

3) 1月6日 (0.1.2歳児混合クラス)

『わにわにのおふる』(小風さち作、山口マオ絵、福音館書店)『だるまさんと』(かがくいひろし作、ブロンズ新社)いずれも大型絵本

Bさんやスタッフと読みあいをして自分の心に響くものを選んだ。「どのページを見ても自然と笑ってしまって、(略)表情や行動がすべてかわいい」「子どもたちにも真似をして、体を動かしながら音のリズムの楽しさを感じてもらいたい」という視点で選書した。いずれもごく短いものなので、文章は暗記して臨んだ。

実践記録に、「子どもたちと楽しみながら読むことができるようになった。子どもたちの声の前より聞けるようになった」と記している。

6. 小学校での実践

1) 11月20日 (1年生)

『あさえとちいさいいもうと』(筒井頼子作、林明子絵 福音館書店)

大型絵本を見ながら選んだうちの一冊である。実践に用いたのは普及版で、左手で絵本を持ち、子どもたちに見せ、自分で点訳した紙を児童用の机に置き、右手の手指で点字を読み、それを声に出して読み聞かせた。「(この本は)あさえのおねえさんとしてのやさしさや、一生懸命さが伝わってくるから好

き。自分もあさえと同じような気持ちで読むよう、こころがけた」という。聞き手の子どもたちは、いつもと少し違う読み手の様子を気にすることもなく絵本に集中し、ある場面では身を乗り出して絵本を見る様子も見られた。

2) 12月11日 (4年生)

『いっぴきおおかみのそりり』(福田岩緒作、教育画劇)

「ふれあい文庫」からの借用本。文庫の本をつぎつぎ読破していく様子は、平常、学生がライブラリーの絵本を読んでいく様子そのものであった。「仲間に入りたいのにうまくいかず、一人ぼっちになってしまうそりりに、森の中の動物たちが見せる温かさが好き」という理由で選んだこの本は、点字を並行して使用した実践の二回目となった。前回より子どもたちの様子を見ながら実践することができたと振り返っている。実践の様子を見たスタッフは、絵本を見る子どもたちの真剣なまなざしが印象的だったと振り返っている。

3) 1月29日 (5年生)

『ラプンツェル』(『子どもに語るグリムの昔話3』佐々梨代子・野村滋訳) ストーリーテリング

高学年なので、しっかりしたお話を選びたい、ストーリーテリングをやりたいという希望がAさんから出た。「グリム童話」で「女の子が主人公」で「いろんなことを乗り越えて幸せになる話」を希望した。実践時間とAさんの希望を考慮し、4作品をスタッフが読み聞かせた。Aさんが選んだのは『ラプンツェル』。「登場人物の心情や、誰かを想うこと、恐ろしいことに対しても立ち向かう勇敢さを伝えることができた」という思いで選んだ。そして、その10分を超える作品を語る前に、Aさんは次のように意気込みを書いている。「視覚的に伝える要素がないので、亭主や王子の勇敢さやラプンツェルのやさしさ、魔法使いの怖さなどを表現できるように」「練習を積み重ねて自分の言葉で話ができるくらいにお話の流れを頭に入れておきたい」。

練習を聞くと、よく覚えていて、後半はよいが序盤のレタス畑のシーンは聞いていてもイメージがわからなかった。そこでAさんに話を聞くと、初めの方

はあまり好きではない、レタス畑がどんなものかわからない、とのことだったので、写実的な『ラプンツェル』の大版の絵本を紹介しイメージを膨らませた。実践記録には、「少し退屈そうにしている子もいましたが、私の方を見て最後まで集中して聴いてくれている様子の子もいました。反応が声に出ることはありませんでしたが、声がなくても聴いてくれているということが伝わってくる気がしました」と記している。

7. 現在のAさんと、読み聞かせの実践の授業を振り返る

平成28年10月、保育士2年目のAさんに話を聞く機会を得た。Aさんは卒業と同時に社会福祉法人が運営することも園に勤務している。障害に理解のあるバリアフリーの園で、2歳児を複数で担任し、多忙だが充実した毎日を送っているということだ。仕事の中でもほぼ毎日園児たちに読み聞かせをしている。園の所有している絵本はあまり多くはなく、園が市立図書館から団体貸し出しを受けている本も、「ほかの先生のようにぱっととってすぐ読むことができない」。そこで、休日に公立の図書館に行き、2歳児コーナーを中心に子どもたちに読みたいと思える絵本を選び、家で暗記して読んでいるようだ。図書館の貸し出し冊数の上限が10冊というのが目下の悩みである。残念ながら「ふれあい文庫」との縁は切れてしまったが、子どもたちに喜んでもらえる本を自分で選ぶのは難しいけれど楽しいということだ。現在好きな絵本の話もしてくれた。

読み聞かせの実践の授業を振り返ってみても、困ったり戸惑ったりしたことはなく、楽しみながら受講したが、何より楽しかったのは仲間と実践の準備をしている時だったという。一緒に授業を作り上げていった仲間とは、今も頻繁に連絡を取り合っている。

また、現場に出てから、実践を重ねたことがとても役に立っていることに気がついた。本の選び方や読み方だけではなく、学生時代に子どもの前に立って本を読むということを繰り返した経験がAさんの今につながっているようだ。

子どもに読み聞かせをする中でなによりうれしいのが、持って行った本を見て、「それ読んで」と言ってもらって、読んで後に「おもしろかったあ!」という反応が返ってくるのだという。本を選ぶこと・読むこと、いずれも楽しんで続けている様子が窺えた。

8. おわりに

「読み聞かせの実践」では、「絵本をみずからよく味わうとともに、対象を考慮しながら絵本を選ぶことができる」「絵本の読み聞かせの技術を身に付け、心のこもった読み聞かせができる」という達成目標を掲げている。「対象を考慮しながら絵本を選ぶ」ためには、まずたくさんの「絵本をみずからよく味わう」ことができなくてはならない。視覚障害を持つAさんが、自分で本に出合い読んで味わうためにはどうしたらよいかを考え、支援方法を模索した。

そのなかで、盲学校の司書から提供を受けた「ふれあい文庫」の情報と、文庫の姿勢はその後の授業の大きな助けとなった。これにより、Aさんは健常な学生と同じようにたくさんの絵本をみずから読み、味わうことができた。また、視覚障害者の読書＝点字と考えていた筆者は、ここでたくさんの読書支援法に触れ、耳（音声）、目（墨字）、点字のうちどういう形で情報が入ってくるのがその人にとって楽なのかを見極めることにより、選択する読書方法が違ふ、という重要な気づきをさせてもらった。

「読み聞かせの技術を身に付け、心のこもった読み聞かせができる」という点では、視覚障害が障壁となりにくい読み聞かせの方法の選択肢をあらかじめ考え、いくつか提示することにより、Aさんは読みたい本、やりたい実践方法にどんどん挑戦していくことができた。その中で、子どもたちに伝えなかった、本の面白さ・楽しさ、登場人物の強さ・やさしさ・勇気などを伝えられたという実感を得ることができた。ただ、いろいろな形で実践ができた一方、それを深めていく、あるいは自分で適した実践方法を工夫するという点では物足りなさも残った。これは、Aさんが今後読み聞かせをする中で深めて

いってほしいと思う。

視覚障害のある学生へどのように授業をすすめるべきか模索してきたが、障害を持つ学生が、持たない学生と全く同じ授業ができることがバリアフリーではない。授業の目標に向けて、一人一人の学生に最適な支援の仕方とは何か、その支援方法を学内にとどまらず広く求め、柔軟に対応していったことにより、一定の成果を得る授業が展開できたのではないだろうか。

Aさんが自分で読んだ本から実践に使用したのは、結果的に『いっぴきおおかみのそり』のみであった。これについてAさんは、「読んでもらった方がおはなしのイメージがわかりやすい」と述べている。小学1年から点字を覚え、自分で「一番情報を入れやすい」点字は、健常者にとっての墨字にあたる。物語に親しんでいくとき、文字を読めるか否かにかかわらず、「読み聞かせ」は、物語を楽しむうえで大切な役割を担っていることも再認識できた。

さらに、読み手と聞き手の関係についてだが、一冊目の『あさえとちいさいいもうと』は選書時、筆者がAさんに読み聞かせをしたものだ。本書を含め4冊読んだが、読んでいて筆者が一番しっくりきたのが本書だ。Aさんは4冊すべて借りだして最終的に本書を選んでいる。幼保園で選んだ紙芝居は、ペアのBさんが数作品読んだ中で、Bさんが一番おもしろいと思ったものであり、ストーリーテリングに選んだ『ラプンツェル』はそれを読み聞かせた司書が、一番好みだったと後に話している。たった3冊だけだが、読み手の「おもしろい・好き」という感情が、聞き手にお話をより面白く感じさせる要素になるように思えてならない。

現在のAさんの姿を見ても、本を選ぶこと、読み聞かせに向けて準備すること、子どもたちと一冊の絵本の楽しみを共有すること、そのいずれもおおざりにすることなく、自分自身も楽しんでいる様子が窺える。方法はいろいろあるが、わたしたちが子どもに読み聞かせをする際に本当に大切に考えているこれらのことを、Aさんが現場で実践しているのを喜ばしく思うとともに、「読み聞かせの実践」という授業がその一助となっていれば幸いである。

この授業をするにあたって、たくさんの方にお世話になった。なかでも貴重な助言と協力をしていただいた島根県立盲学校司書の巢山昌乃さん、並びに特定非営利活動法人「てんやく絵本 ふれあい文

庫」には心より感謝申し上げます。

※おはなしレストランライブラリーの蔵書は2013年10月時点のデータである。

(受稿 平成28年10月19日, 受理 平成28年11月24日)